

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320030

研究課題名（和文） バルカン半島中部における文化的多様性の歴史的研究

研究課題名（英文） Historical Study of the Cultural Diversity in the Central Balkan Peninsula

研究代表者

益田 朋幸（MASUDA TOMOYUKI）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70257236

研究成果の概要（和文）：

セルビア南部、コソヴォ、マケドニア、アルバニアのフィールドワークを行ない、初期キリスト教遺跡、ビザンティン聖堂（とくに壁画）、初期オスマン・モスクの調査を実施した。古代末期から中世、中世末期から近世への文化移行期の様相を、建築と絵画から具体的に考え、現代当該地の文化的多様性の起源を検討した。とくに14世紀のビザンティン聖堂装飾プログラムについて、新たな知見を多数得ることができた。

研究成果の概要（英文）：

Our team had surveyed the late Roman and early Christian sites, Byzantine churches and monasteries with frescoes, and early Ottoman mosques in southern Serbia, Kosovo, Macedonia and Albania. From art-historical and architectural-historical points of view, we examined the changing aspects of culture from late Roman to medieval, and from medieval to modern. In particular, we gained several important knowledges about the decoration program of the 14th-century Byzantine churches.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2012年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総計	5,600,000	1,680,000	7,280,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：西洋美術史、ビザンティン美術、キリスト教考古学、キリスト教図像学、聖堂装飾プログラム、バルカン半島

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現代のバルカン半島は、イスラーム教とキリスト教（カトリックと正教）の宗教に加えて、多様な民族・言語の人々が、必ずしも平和裡にはと言えない状況で共存している。歴史的にこの地は、ローマ帝国、ビザンティン帝国、中世セルビア王国、ブルガリア王国、オスマン帝国等によって支配されてきた。

(2) この土地の多様な文化を理解するためには、歴史的起源に遡って考えなければならない。そうすることによってのみ、現代のバルカン半島の正しい理解が可能になるだろう。

## 2. 研究の目的

(1) 文化分析には言語を対象とする方法もあるが、我々は物質文化、とくに宗教建築の建築様式、絵画様式を対象とする。バルカン半

島の多様性は、主として宗教の差に起因することが多く、宗教建築はその端的な表象であるからである。

(2) ローマ遺跡における神殿遺構、初期キリスト教遺跡におけるキリスト教バシリカ遺構、ビザンティン聖堂と修道院、初期オスマン帝国のモスクを調査の対象とし、建築様式の変遷を分析する。ビザンティン聖堂・修道院には壁画（フレスコ）が残っており、装飾プログラムの分析は、当時の人々のメンタリティ解明に有効である。

(3) 上述の宗教建築の様式、絵画の装飾プログラムを比較して、古代ローマ～中世ビザンティン～近世オスマンの文化移行の実際を検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 年次ごとに調査対象地域を決め、セルビア南部、アルバニア、コソヴォ、マケドニアのフィールドワークを行なう。比較対象としてギリシア北部、ビザンティン帝国首都のコンスタンティノポリス（現イスタンブール）も調査の対象とした。

(2) 各国考古局の許可の下、写真撮影と、必要に応じて簡単な測量を行なった。聖堂・修道院については、フレスコの配置図を作成する。撮影は大型 CCD をもつデジタル・カメラで、ASA6400 前後、広角レンズ 14～28 ミリによって行なうことで、とくにフレスコのプログラムを記録する。

(3) 建築様式については、ローマのバシリカがバルカン半島のキリスト教にどのように受容されたかを考える。聖堂の規模、円柱か積み石の角柱か、床モザイクの質と図像、建築彫刻の素材と技法等を比較考察する。

(4) 9 世紀に内接十字式の聖堂が登場すると、バルカン特有の聖堂建築が確立する（ラシュカ派等）。それはやがてイスラーム建築に摂取されるが、必ずしも同時代のビザンティン聖堂を模倣することにはならず、初期ビザンティンの様式が復古的に採用される。

(5) 壁画のプログラムは、14 世紀にこの地に革新が行なわれた。ミハイルとエウティキオスという二人組の画家は、パナギア・ペリブレプトス聖堂（オフリド、マケドニア）、ストゥデニツァ修道院「王の聖堂」（セルビア）、スヴェーティ・ニキタ聖堂（パニャニ、マケドニア）、スヴェーティ・ギョルギ聖堂（スタロ・ナゴリチャネ、マケドニア）、ボゴロディツァ・リエヴィシユカ聖堂（プリズレン、コソヴォ）において、フレスコ制作を行ない、

グラチャニツァ修道院（プリシュティナ、コソヴォ）は二人組の弟子の作と考えられている。これら一群の壁画には、ビザンティンの伝統的なイコノグラフィに加えて、西欧カトリックの影響が処々に見てとれる。装飾プログラムの分析によって、13 世紀末～14 世紀前半の当地のパワーバランスが明らかになる。ビザンティンとローマの間で政治的に生き残らなければならなかった、セルビア王国の状況の反映である。

### 4. 研究成果

(1) 初期キリスト教バシリカの多くは、小規模なものである。大理石円柱ではなく、積み石角柱によるものが過半であるが、中にはプロコネシアン大理石に首都コンスタンティノポリスの工房が彫刻を施したテンプロンも見出された。床モザイクの様式はローカルなものであるが、オフリド（マケドニア）の洗礼堂、プトリント（アルバニア）の洗礼堂には、優れた様式の床モザイクが残っている。

(2) サランダ（アルバニア）の 40 人殉教者バシリカは、現在発掘が進行中で、十分な調査は許可されなかったが、「聖人の髯を引っ張るキリスト」という奇妙なフレスコが発見された。典拠不明で、まったく前例のない図像である。発掘担当の現地研究者は、9 世紀という年代を提示しているが、根拠がない。このフレスコについては、引き続き位置づけを行ないたい。

(3) オスマン・モスクに関しては、プリズレン（コソヴォ）のシナン・パシャ・ジャミイが興味深い作例であった。ミマル・シナンはコンスタンティノポリスのアギア・ソフィアの様式から出発して、イスラーム独自の様式に至った大建築家であるが、プリズレンのモスクは、抽象的なデザインを積極的に採り入れて、小型ながら優れた作行きを見せている。

(4) 14 世紀のビザンティン聖堂・修道院の装飾プログラムに、もっとも大きな成果が得られた。ミハイルとエウティキオスのプログラムを、同時代の諸作例と比較することによって、彼らの新しい点、保守的な点の両面が解明された。聖母マリアの生涯をサイクルで描く点に、彼らの新しさがある。コーラ修道院（イスタンブール）とも主題選択が異なり、「水の試み」といった主題に対して、斬新な解釈が行なわれた。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

・益田朋幸「ビザンティンの単廊式バシリカにおけるキリスト伝の配置」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』3号、2013年3月、66-78頁（査読無）

・辻絵理子「オリブ山というトポス—詩篇写本における使徒言行録サイクル」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』3号、2013年3月、16-29頁（査読有）

・武田一文「生と死の間で—ポロシキ修道院「キミシス」における感情表現について」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』3号、2013年3月、92-106頁（査読有）

・益田朋幸「コンスタンティノポリス総主教座の聖者暦」『早稲田大学高等研究所紀要』5号、2013年3月、117-133頁（査読無）

・菅原裕文・益田朋幸「カッパドキア円柱式聖堂群の装飾プログラムと制作順」『美術史研究』第50冊、2012年12月、45-79頁（査読有）

・菅原裕文「優しさの形：エレウサ型アンナ像の出現とその意義」『地中海学研究』35号、2012年6月、55-74頁（査読有）

・益田朋幸「ビザンティン聖堂装飾のアイコンとナラティヴ」甚野尚志・益田朋幸編『中世の時間意識』知泉書館、2012年5月、309-335頁（査読無）

・辻絵理子「神の足が立つところ—磔刑図像に描かれた礼拝者たちとその時間構造」甚野尚志・益田朋幸編『中世の時間意識』知泉書館、2012年5月、287-308頁（査読無）

・益田朋幸「ビザンティン聖堂装飾における中軸の図像」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』2号、2012年3月、58-78頁（査読無） [https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/36088/1/Ekufurashisu\\_2\\_Masuda.pdf](https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/36088/1/Ekufurashisu_2_Masuda.pdf)

・益田朋幸「オフリド周辺の『キリスト三態』に関する覚書」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』57-3、2012年2月、5-20頁（査読無） [http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/36996/1/BungakuKenkyukaKiy03\\_57\\_Masuda.pdf](http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/36996/1/BungakuKenkyukaKiy03_57_Masuda.pdf)

・浅野和生・益田朋幸「アルバニア美術史紀行」『SPAZIO』2011年、<http://www.nttdatagetronics.co.jp/profile/spazio/spazio70/asano/index.html>（査読無）

・益田朋幸「イェラーキ（ペロポネソス半島）、エヴァンゲリストリア聖堂の装飾プログラム」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』1号、2011年3月、70-81頁（査読無） [http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/34484/1/Ekufurashisu\\_1\\_Masuda.pdf](http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/34484/1/Ekufurashisu_1_Masuda.pdf)

・菅原裕文「聖母子像にともなう天使の役割」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』1号、2011年3月、56-69頁（査読有） <http://hdl.handle.net/2065/34480>

・益田朋幸「『キリストと十二使徒』図像の

説話的要素」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』56-3、2011年2月、35-50頁（査読無） [http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/36907/1/BungakuKenkyukaKiy03\\_56\\_Masuda.pdf](http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/36907/1/BungakuKenkyukaKiy03_56_Masuda.pdf)

・武田一文「パナギア・マヴリオティッサ修道院の聖堂装飾プログラム—「キミシス」と「最後の審判」を中心として」『美術史研究』48冊、23-44頁（査読有）

・浅野和生・益田朋幸「キプロス美術史紀行」『SPAZIO』2010年、<http://www.nttdatagetronics.co.jp/profile/spazio/spazio69/asano/index.html>

〔学会発表〕（計9件）

・益田朋幸「エル・グレコとビザンティン美術」シンポジウム「エル・グレコ再考 1541-2014年：研究の現状と諸問題」（於早稲田大学）2013年1月

・益田朋幸「ビザンティンの崖」地中海学会第36回大会（於尾道市しまなみ交流館）2012年6月

・益田朋幸「聖母マリアの予型——ビザンティン美術におけるリヴァイヴァルとサヴァイヴァル」早稲田大学ヨーロッパ中世ルネサンス研究所第10回研究会（於早稲田大学）2012年6月

・益田朋幸「マリグラード島（アルバニア領プレスパ湖）聖母聖堂のフレスコ装飾」日本ビザンツ学会第10回大会（於一橋大学）2012年3月

・浅野和生「ドゥラス（アルバニア）の円形競技場内の礼拝堂とモザイク」日本ビザンツ学会第10回大会（於一橋大学）2012年3月

・益田朋幸「聖エカテリニ修道院の美術とイスラーム世界」早稲田大学イスラーム地域研究機構拠点強化事業「『モノ』の世界から見たイスラーム」（於早稲田大学）2011年12月

・益田朋幸「ビザンティン聖堂装飾のアイコンとナラティヴ」美学会東部会例会（於早稲田大学）2011年12月3日

・益田朋幸「ビザンツ帝国と地中海世界—東地中海における美術の変容」地中海学会春期連続講演会（於ブリヂストン美術館）2011年5月

・益田朋幸「『キリストと十二使徒』図像の含意」早稲田大学美術史学会総会（於早稲田大学）2010年6月

〔図書〕（計2件）

・甚野尚志・益田朋幸編『中世の時間意識』知泉書館、2012年5月、全374頁

・益田朋幸『ビザンティンの聖堂美術』中央公論新社 2011年6月 全231頁

〔その他〕

ホームページ等

ビザンティン聖堂データベース  
<http://db2.littera.waseda.ac.jp/byzantine2/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

益田 朋幸 (TOMOYUKI MASUDA)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：70257236

### (2) 研究分担者

浅野 和生 (KAZUO ASANO)  
愛知教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：80167890  
菅原 裕文 (HIROHUMI SUGAWARA)  
早稲田大学・ヨーロッパ中世ルネサンス研  
究所・招聘研究員  
研究者番号：40537875

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

辻 絵理子 (ERIKO TSUJI)  
早稲田大学・文学学術院・非常勤講師  
武田 一文 (KAZUFUMI TAKEDA)  
早稲田大学大学院・文学研究科・博士後期  
課程  
海老原 梨江 (RIE EBIHARA)  
東京造形大学・非常勤講師